君を追いかけて

minimum

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を追いかけて

【Ｎコード】

Ｎ４１８７Ｈ

【作者名】

ｍｉｎｉｍｕｍ

【あらすじ】

突然姿を消した志保。志保が居なくなってから気付く想い。それから新一が取った行動とは――――？※この話は新志です。新蘭派の方はｂａｃｋして下さい。ある意味基本にかえってみました。

（前書き）

このお話は新志です。ご注意を。
私としては甘々にしたつもりです……たぶん。

―――アメリカ合衆国・ワシントン。

「…やっと見つけた…。はいば……宮野。」

「く、ど……くん…。」

目の前にいる人物は、俺が1年かけて探し求めていた人物。
俺の見知った姿ではないが、透けるような色白の肌、陽に当たると綺麗な金髪に見える赤茶の髪、そして吸い込まれそうなほど深い翡翠の大きな瞳。

…それらは、決して長くはない時間を一緒に過ごしてきた時と全く変わっていない。

あの頃と違うのは、小学生の姿ではなく大人の姿をしている事と、顎先くらいに短く切りそろえられていた髪が、今は肩より少し下まで長くなったことくらいだろうか。
ヨーロッパの血が流れているせいか、日本人の同年代と比べてもずっと大人っぽい。

「貴方、何で…。」

「そりゃこっちのセリフだってーの。…取り合えず中に入れてくんねぇ？」

宮野の返事も聞かず、さっさと室内へ上がり込む。
一人暮らしにしては随分広い小綺麗なアパート。

リビングにはテレビとソファー、テーブル、いくつかの調度品があるくらいで、とても女の部屋だとは思えないくらいにシンプルだ。
俺の後ろから来た宮野はそのままキッチンへ移動し、コーヒーを淹れる準備をしている。
何となくお互い気まずくて、コーヒーが入るまで俺は窓際に立ち、そこから見えるワシントンの景色をぼんやり眺めていた。

「工藤君、コーヒー入ったから。…こっちに座ったら？」
「あ、ああ。サンキュー。」

宮野が淹れたコーヒー（あの頃は灰原だったが）を飲むのは1年ちょっと振りだ。
その間に自分や蘭、博士や喫茶店のコーヒーを幾度となく飲んできたが、どうもしっくりこなかった。

灰原はコーヒーを淹れるのが抜群に上手かった。

「適当に淹れてるだけ」とよく言っていたが、俺の舌には灰原のコーヒーが一番合っていた。
何も言わずとも、やや猫舌な俺の為に、少し温めにしてあるブラックコーヒー。
いつ来ても俺好みの味。
いつの間にか灰原が淹れるコーヒーに慣れてしまって、他のコーヒーでは満足しなくなっていた。

———やっぱりコイツが淹れるコーヒーが一番だな。

1年ちょっと振りのコーヒーは、あの頃の味と全く変わっていなかった。

やはり何も言わずとも、俺好みに温度を下げたブラックコーヒー。
「ここからの景色はサイコーだな。」
「…ええ。私もこの景色を一目見て、このアパートに決めたの。」
ワシントンの都会的な街並みと、その向こうに広がる山や湖などの自然。その両極にあるものが見事にマッチした景色だった。

———さぁ、そろそろ本題に入らなければ。

「……何で俺がここに来たのか分かってると思うけど…。」
「…。」
「日本に戻って来る気はないのか？」

灰原が姿を消したのは、本当に突然のことだった。
黒の組織との戦いも無事に決着がつき、その時手に入れたＡＰＴＸ４８６９のデータを基に、灰原は解毒剤を完成させた。

先に元の姿に戻ったのは俺。
「一緒に戻ろう」との俺の言葉に耳を傾けず、「何かあったら私がいないと困るでしょ？」と納得しない俺にずっと言い続けていた。
灰原の正論に渋々折れて、俺一人で解毒剤を口にした。
無事に工藤新一の身体に戻ったが、「１か月は検査する」との言葉に素直に従った。

その間には高校へ復学したり、蘭に告白して恋人となったり、忙しいながらも充実した日々を送っていた。
そして1か月があっという間に経ち、「どこも異常なし。検査は終了」と、灰原にお墨付きを貰ったのだ。

今思えば、あの頃の俺は明らかに浮かれていたんだ。
待ち望んだ元の身体。ずっと淡い恋心を抱いていた蘭が恋人となった事。そして自分を偽る事をしなくていい自由な生活。

そんな毎日に浮かれ過ぎて、灰原の決意にちっとも気が付かなかった。

検査終了と言われてから更に1週間後。
その日は休日で、蘭とのデートの為にいつもより早起きしていた。
そんな中、けたたましく鳴る電話のベル。

――――哀君が居なくなったんじゃ。
――――手紙を残して出て行ってしまったんじゃ。

駆け付けた阿笠邸の地下室は、灰原が研究室として使っていた頃とは随分違っていた。
灰原自身の私物は一切なく、元々ここにあった物だけが残されていた。
綺麗に片づけられた室内。
机の上には1通の手紙。

『ありがとう。

さようなら。』

たったそれだけ。
何故ここを出て行くのか、どこへ行くのか、そんな事はどこにも書かれていなかった。

きっと彼女はここに来た時から、この生活に終わりが来る事を覚悟していたんだろう。
自分がここにいるのは解毒剤の開発の為、と。
それが終わった今、自分がここにいる理由はない、と。

「灰原…。」

そんな灰原の気持ちに気付かなかった自分に腹が立つ。
灰原はどんな思いでここを出て行ったのだろう？

「大切なものは失ってからじゃないと分からない」と言うが、俺自身にもまさにピッタリと当てはまった。
いつの間にか、灰原が隣にいる事が当たり前すぎて、俺の傍から居なくなるなんて考えてもみなかった。
灰原を失った喪失感は大きくて、それまでの充実した生活の歯車が少しずつ狂っていった。
あんなに好きだった蘭の事も、灰原を失って初めて「家族愛」だったんだと気が付いた。
蘭に正直に話すと、

「そうだと気付いてたよ。…気付いて欲しくなかったけど。」

と寂しそうな顔をして答えてくれた。

結局、蘭との付き合いは3か月にも満たなかった。

それから俺は本格的に灰原の行方を探すようになった。
博士は「哀君の意志で出て行ったんじゃ。本人は探して欲しくないはずじゃよ」と半ば諦めていたようだが、博士は灰原の写真を見ながら、毎日泣いている事を知っていた。
本当は灰原に会いたいだろうに、アイツの邪魔はしたくないと耐える博士。
そんな博士の為に、何より俺自身が灰原に会いたい気持ちを抑えられない為に、ずっと灰原の行方を探し続けた。

そして1年が経った。
探偵である俺は、人探しなんて簡単な事だと思っていたが、さすが灰原というか、実に巧妙に自分の居場所を隠していた。
そしてやっと見つけた灰原――――宮野志保の現住所。

「博士、迎えに行ってくる。」

その一言だけを残して、俺はアメリカ行きの飛行機に飛び乗った。

「俺さ、ずっと後悔してたんだ。」
「……後悔？」
「お前の気持ちに気付いてやれなかった事。あれだけお前の事守る

って言ってきたのにな。」
「貴方はいつだって守ってくれたわ…。」
「…お前は、米花町は自分の居場所じゃないって思ってるかも知んねーけど、あそこはお前がやっと見つけた心安らぐ場所だろ？博士もお前の帰りを待ってる。」
「…。」

ソファーに向かい合って座っている宮野は、俯いてしまってどんな表情をしているのか全く見えない。
ただ、膝の上で組んだ両手が、わずかに震えているのが見えた。

「お前にとって博士は、父親みてーな存在だろ？博士だってお前を娘だと思ってる。」
「そ、んな…。娘、だなんて。」
「あそこはお前の『家』なんだよ。灰原哀だろーが宮野志保だろーが、そんな事は関係ねーよ。お前はお前だろ？」
「…。」
「……それに、俺がもたない。」
「…え？」
「宮野……志保が居ない毎日なんて、俺がもたない。」
「！」

ビックリした表情でパッと顔を上げる。
潤んだ瞳を大きく開け、少し赤らめた顔を俺に向けてくる。

———コイツ、こんなに可愛い顔してたっけ？

「何、言ってるのよ…。貴方には蘭さんがいるでしょ？」

予想通りの答えが返って来る。
コイツの前であれだけ蘭！蘭！と言ってきたんだ。信じられなくても当然かもしれない。
俺を見ていた志保の瞳は少し寂しそうに下に向けられ、長い睫毛でその瞳は隠された。

「蘭とは別れたんだ。お前が居なくなって少ししてから…。」
「まさか…。」
「お前が居なくなってから、自分の本当の気持ちに気が付いたんだ。…蘭の事は今でも好きだけど、『家族愛』だったんだよ。」
「……家族愛？」
「蘭にはさ、なんて言うか…『抱きしめたい』とか『キスしたい』とか、そんな男としての気持ちが湧いてこないんだ。たぶん、俺の中で蘭を神聖化しちまってるんだと思う。」
「…。」
「俺はさ、お前の隣にいるのが一番しっくりくるんだよ。お前が傍にいない間、気が狂いそうだった。……蘭には、そこまでの気持ちになった事がねーんだよ。」

志保の両手の震えは、さっきよりも大きくなっている。
俺はゆっくりと志保の隣に移動し、その両手を優しく包み込んだ。
一瞬ビクッと志保の身体自体が震えたが、振り払われることはなかった。

「俺が好きなのは……志保、お前なんだよ。」

その瞬間、志保の瞳から大粒の涙が零れ出した。

一粒、二粒…と、その涙は次々と俺達の両手や志保の膝の上に落ちてくる。

「な、んで、私な、んか……。」

「お前だって俺の事、命がけで守ってくれただろ？それに自分の身を削る思いで解毒剤を作ってくれた。……それだけでも十分志保に惚れる要因はあるんだけど。」

「だって…だって、蘭さ、ん。」

「蘭も知ってる。お前の事、全部話した…。納得してもらうまで時間はかかったけど、今じゃ応援してくれてる。…蘭もお前に会いたいって。」

「…私、に？」

「お前と親友になりたいって。…だから絶対連れて帰って来いって言われてるんだよ、俺。」

志保の事を話した時の蘭は、最初は驚きに固まっていたが、「哀ちゃん、いっぱい辛い目にあったんだね」と涙を流していた。

今ではすっかり元の幼馴染の関係に戻った俺達。顔を合わす度に「志保さん、まだ見つからないの？」「早く連れて帰ってきなさいよ」「連れて帰って来なかったら、回し蹴りお見舞いするからね！」と、志保の話題ばかり上がるようになっていた。

やっぱり蘭は、俺の最高の幼馴染だ。

「貴方も…蘭さんも…、ホント、バカね…。」

「そりゃお前のせいだろ。蘭は特に、お前にメロメロだ。」

日本に帰ったら、本気で志保を蘭に取られるんではないだろうか。

「…で？まだお前からの返事、聞いてないんだけど…。」
志保の両手を握っていた手を外し、そのまま志保の背中に持っていって抱きしめた。
小学生の頃はほとんど体格の差はなかったが、今の志保はこんなにも小さい。

「言わなくったって、気付いてるんでしょ？」
「でも、お前の口から聞きたい。」
「…フフッ、意地悪ね。」

腕の中の志保は恥かしげに顔を上げ、俺の顔をじっと見つめた。
「…私が日本を発ったのは、役目を終えたから…ってこともあったけど、本当は、貴方と蘭さんが一緒にいる姿を見たくなかったの…。嫉妬に狂うのが怖かった。私にはそんな資格ないのに…。」
「志保…。」

志保はそれだけ言うと、ギュッと俺の首に抱きついてきた。
首筋に顔を埋めて、懺悔でもするかのように一言一言、言葉を紡ぎだす。

「貴方の傍を離れれば、思い出に出来るんじゃないかと思った。…でも無理だった。それどころか日に日に貴方への想いが募っていったわ。」
俺は志保の言葉を聞き逃すまいと、更に強く志保を抱きしめた。

「蘭さんに申し訳ないって思いながらも、想いは止められなかったの。」

そう言うと志保は再び顔を上げて、俺の顔と向き合った。

「……貴方が好きなの。…ずっと前から…。」

「…ありがとう、志保。俺もお前の事愛してる…。」

それから俺達はごくごく自然に、そっと優しいキスを交わした。

その後の志保は、俺の腕の中でずっと「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝り続けていた。

たぶんそれは、蘭に対する懺悔。

博士に対する懺悔。

…そして俺に対する懺悔…。

「明美さんの分も、二人で一緒に幸せになろうな……。」

＊＊＊

「志保さーん！早く行こう！」
「ええ。じゃあ工藤君、行って来るわね。」
「へイへ～イ。気を付けてな。」

あれから日本へ戻って来た俺達。
当然、俺は志保と同棲するつもりでいたのだが、
『バカもん！当分志保君はお前にはやらんぞ！』
と、親バカ全開な博士に大反対されてしまった。
そんな俺に対し、志保はクスクスと笑うだけで、「博士の壁は高いわね」とさっそうと阿笠邸に帰って行った。
それから志保は、蘭の希望通り親友となる事ができ、今では俺よりも蘭の方を優先している（チクショー）。
俺の危惧していた通り、蘭に志保を取られてしまった感は否めない。
それでも志保は幸せそうだから、幸せそうに笑うから――――

「…ま、いっか。」

結局、俺はとことん志保に甘いらしい。
ぬけるような青空が、俺にはちょっと眩しかった。

（後書き）

色々設定に無理がありましたね…。
突然消えた哀ちゃんの学校はどうなった？とか、今、志保ちゃんは何してるの？とか、住所を巧妙に隠すってどうやって？とか…。
もちろん、その辺は作者の私も分かりません＾＾；
その辺は皆様のご想像にお任せいたします。
因みに私は、ワシントンへは行った事はありません。
話に出てくるワシントンの景色の描写は適当です。雰囲気だけ伝わってくれれば良いのです（＊＾＿＾＊）
ありきたりなお話でしたが、まぁ、基本にかえってみた…ということでお許しください。
お読み頂きありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4187h/

君を追いかけて

2010年10月8日22時34分発行